

建斗は妹の里奈と母と三人で父の墓参りに来た。里奈は父が生涯をかけて植樹した森を見に行こうと母を誘うが、母はそれを拒む。

〈著者紹介〉

森沢明夫 一九六九年、千葉県生まれ。早稲田大学卒業。日韓でベストセラーとなった『虹の岬の喫茶店』は、吉永小百合主演で映画化。高倉健の遺作となった映画「あなたへ」の小説版や、有村架純主演の「夏美のホタル」の原作などもベストセラーに。他にも『大事なことは小声でささやく』『津軽百年食堂』『癒し屋キリコの約束』『きらきら眼鏡』など、映画・テレビドラマ・コミック化されたヒット作多数。近著に『おいしくて泣くとき』『本が紡いだ五つの奇跡』『ロールキャベツ』『さやかの寿司』など。

X(エックス): @morisawa_akio

Instagram: @morisawa.a

桜が散っても

2024年12月20日 第1刷発行



著 者 森沢明夫

発行人 見城 徹

編集人 森下康樹

編集者 山口奈緒子 君和田麻子

発行所 株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話: 03(5411)6211(編集)

03(5411)6222(営業)

公式HP: <https://www.gentosha.co.jp/>

印刷・製本所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料小社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©AKIO MORISAWA, GENTOSHA 2024

Printed in Japan

ISBN978-4-344-04389-3 C0093

この本に関するご意見・ご感想は、

下記アンケートフォームからお寄せください。

<https://www.gentosha.co.jp/e/>



「え？」

「なんで？」

俺と里奈が、ほぼ同時に言った。

「もう写真で見せてもらったし。あそこに少し見えてる、あの桜でしょ？　もう、お花も散ってるみたいだしね」

言いながら母は、斜面の上に少しだけ見えている桜の巨木に視線を送った。釣られて俺と里奈も斜面の上を見上げた。

「本当に、いいの？　お父さんが世話した桜だよ？」

里奈が、訊く。

「うん。いい」

淋しさと気怠さを混ぜ合わせたような顔で、母は頷いた。

「お兄ちゃん——」

里奈が、助けを求めるように俺を見た。

「まあ、母さんがいいなら、あそこは、いいんじゃないか？」

俺は宥めるような口調で言った。

なにしろ、あの巨木は、すでに樹勢が弱まっている。父亡きまとなつては「枯れゆく桜」なわけだし、父からしたら、救うことができなかった「無念の桜」に違いない。いまさら、あの桜を見せたところで、母の感情にポジティブな影響が生じるとも思えない。

いいよね、父さん——。

墓石を横目に見ながら、俺は胸の内でつぶやいた。

と、そのとき、ふと思った。

いつか、あの桜が枯れたときも——、あれほどの巨木であつても、やっぱり二十一グラムだけ軽くなるのかな……。

俺は、再び斜面の上に視線を送った。

すると、里奈が気持ちを入れ替えたような声を出した。

「じゃあ、分かった。「花の森」に行こう」

「ハナノ——、モリ？」

母が、小首を傾げた。

「うん。お父さんが植樹した桜の丘のことだよ。お父さんが、そう名付けたんだって」

「……………」

里奈の言葉に、母は一瞬、瞳を翳らせたように見えた。

「行くよね、お母さん？」

里奈が、念を押した。

すると母は「ふう」とため息をこぼした。

「やっぱり、そこも、見なくていいかな」

「え——」

「ちゃんと約束どおり、お墓参りはしたでしょ？」

母は、小さな子供を諭すような声でそう言った。

「でも……」

「なんか、ちょっと、疲れちゃった。お母さん、そろそろ帰りたいかも」

母は眉をハの字にして軽く笑って見せた。

そんな母を、里奈が黙って見詰めていた。母にかけるべき次の言葉が見つからないのだ。

遠くの山でウグイスが鳴いた。

すると、里奈の唇が動いた。

「ここまで来て、嫌だよ……」

「え——」

「わたし、お母さんを連れていきたい」

「里奈……」

「だって、桜でいっぱいになったあの丘にはさ——」と、ここまで言ったとき、ふいに里奈の顔がくしゃっと崩れて、泣き顔になった。「お父さんからの……メッセージが……溢れてるんだもん」

語尾を震わせた里奈の目から、ぼろぼろとしずくが伝い落ちる。

一瞬、ひるんだ母が、「でもね……」と口を開きかけたとき、ほぼ反射的に俺の口から言葉が飛び出していた。

「俺もだよ。俺も、母さんのこと、連れていきたい」

「建斗……」

困ったような顔をした母と、俺の視線がまっすぐにぶつかった。

「俺……、母さんが、植樹の現場を見たくないっていう気持ち、分かるよ。だって、この人——」俺は、ちらりと質素な墓石を見て続けた。「俺たちを放っぱって、桜の植樹にうつつを抜かしてさ、最後は家族を捨てた人だしね。俺だって、正直、完全には許せてないし、墓の前で言うのもナンだけど、しょうもない人だよなって思ってる。でも——、それでもさ、本当にすごいんだよ、あの丘は」

「……………」

「先週、里奈と来たときは満開でさ、めちゃくちゃたくさんの人たちが花見に集まって、みんな嬉しそうに笑ってたんだよ。で、その人たちの笑顔を見てたらさ、なんか、俺、しみじみと、『親父、こんなことをしてたのか、マジですげえな——』って思ってた。だからさ、一度だけでいいから、母さんも見てあげてよ」

そこまで言って、俺は深呼吸をした。

「でも、その桜も……、もう、散っちゃってるでしょ？」

再び眉をハの字にした母は、俺の視線から逃げるように墓石を見下ろしながら言った。

「まあ、たぶんね。でもさ、葉桜だっていいじゃん。この葉っぱが全て花だったら——って、満開をイメージしただけで、感動すると思うからさ」

切々と話した俺の台詞の尻尾を、里奈がつなぐ。

「桜が咲いてるかどうかわからないの。とにかく、わたしは、お父さんが必死につくった『花の森』をお母さんに見せたいだけだから。お願い、お母さん」

切実な目で、里奈は母を見た。

ふわり。ふわり。

コットンタッチの春風が、斜面を滑り降りてくる。

そして、その風が、穏やかな線香の香りを広げて、三人を淡く包み込んだ。すると、
「はあ……」

深いため息をこぼした母が、根負けしたように頷いた。

「分かった。二人がそんなに言うなら——、ね」

最後の「ね」を口にしたほんの一瞬だけ、母の視線は質素な墓石に向けられていた。

墓地を後にした三人は「花の森」に向かった。

ぼつり、ぼつり、と言葉を交わす里奈と母の背中をぼんやりと眺めながら、俺はひとり父の人生を憶っていた。

その人生を、あえてひと言で表現するなら、それは「罪滅ぼしの人生」となるのではないか？

そもそも父は一流企業に勤めていたことで収入は安定していたし、幸せな家庭を持っていたし、趣味を充実させて休日も楽しんでたわけで、はたから見たら順風満帆と映ったはずだ。つまり、脇道になど逸れず、大きく張った帆に追い風を受けながら悠々と生きていくという「常識的」な選択肢もあつたはずなのだ。もちろん、たとえ失声症になったとしても、すでに

手にしている幸福をあえて自分から手放す必要などなかった。

しかし父は、それらを手放した。安定も、帰る場所も、楽しみも、すべて。そして、自分の人生を狂わせた山奥の土地へと移り住み、こつこつと植樹を続けた。

いったい、誰のために？

土砂崩れで命や財産を失った人たちと、それによって心に傷を負った村人たちのためだろうか？

だとしたら、どう考えても道理に^{かな}適っていない。

そもそも父は犯罪者ではなかった。一ミリの「罪」さえも背負っていない真人間だったのだ。それなのに父は自らの人生を犠牲にして——、いや、家族三人の人生まで巻き添えにして、いらぬ「罪滅ぼし」をする人生を選択してしまった。

もしも、父が「罪」を感じるべき相手がいるとするならば、それは、この村の人間などではなく、偏^{ひとえ}に捨て去った三人の家族だけのはずだ。母と、妹と、自分は、なんの落ち度もないにもかかわらず、長きにわたって苦しめられた「被害者」なのだから。

道理に適わぬ選択をした父は、結果として、毎月、手紙と金銭を母に送ることで、家族三人に「罪滅ぼし」をし続け、同時に桑畑村で植樹や全体の仕事をすることで、村人たちにも「罪滅ぼし」をし続けていた。

一ミリたりとも罪のない父が——だ。

あれほど賢かった父が、こんなにも理不尽な人生の選択をするなんて——、やはり、どう考えても狂気の沙汰でしかない。

しかし、その狂気が、いつしか『花の森』をつくり出し、そしていま村人たちをはじめとした、たくさんの人々を笑顔にしているのだ。しかも、おそらくは、この先、何十年にもわたって無数の笑顔を生み出し続けるのだろう。

あらぬ罪を背負い、人々の笑顔の素をつくり出した――。

そんな父の人生は、いったいどう評価されるべきなのだろう。

あるいは、そもそも他者が評価などすべきではないのか？

人生の価値は、手に入れた財産の量ではなく、味わった感情の質と量で決まるはずだ。

だとしたら、父は――。

そこで、ふと俺は、来る途中の車内での会話を思い出した。

母から聞いた、亡くなった「自由人」の話だ。

自由気儘に生きたはずの人ですら、死ぬ間際になると「もっと自由に生きればよかった」と後悔の感情を口にする。だったら普通の人は、少くらい周りに迷惑をかけてでも、自分の心に正直に生きるべきなのかも知れない。そんな話だった。

もしも、そういう生き方を「良し」とするのであれば、父は後悔の無い人生を送ったことになるのだろうか？ それは評価されるべき人生だったということか？ 一生のうちに味わった感情の質と量に、父は納得していたのか？

分らない――。というか、正直に言えば、父が完全に納得できていたとは思えないし、思いたくもない。なにしろ父は、決して浅慮なタイプの人間ではなかったからだ。世界も、人生も、複雑に捉えていたはずだし、そういう人間であって欲しいという思いもある。

分かっていることは、ひとつ。

いまの俺自身の気持ちだ。

もしも父が、後悔のない人生を送ったと納得していたとしても、俺は父の人生を手放しには評価しないし、したくない。

「ふう……」

ひとり静かに嘆息した俺は、いつのまにか腕を組んで歩いている母と妹の後ろ姿を見詰めた。だつてさ、耐えてきたんだよ、母さんも、里奈も、俺だつて――。

胸裏でつぶやき、きゅつと唇に力を込めた。

気づけば、それまで俺たちの頭上を覆っていた樹々の枝が無くなり、周囲が明るくなっていた。そして、まっすぐだった細い道路が右に大きく曲がりはじめた。

「このカーブを曲がり終えたところだよ」

里奈が母に言った。

俺の視界には、少しずつ、あの幅広の歩道のような細長い「公園」が見えてきた。先週、多くの人が花見に集っていたスペースだ。

もうすぐだ。

もうすぐ母が『花の森』と出会う。

そして、三人がカーブを曲がり終えた刹那――、

里奈と母が足を止め、横に並んだ俺も棒立ちになった。

母は両手で口を押さえ、驚愕したように目を見開いていた。

俺もまた「え……」と声を洩らしたまま、呼吸すら忘れたように固まってしまった。

唯一、里奈だけが、目の前に展開した奇跡のような光景を見詰めながら、淋しげに微笑んでいるのだった。

「こ、これって……」

やっとのことで言葉を発した俺に、里奈は小さく頷いて「うん」と返した。

「桜が、散ったあとが——」

呆然とした俺が、つぶやき、

「お父さんの本当のメッセージだったんだよ」

里奈が継いだ。

その里奈の言葉を隣で聞いていた母が、「ひゅ」と音を立てて息を吸ったと思ったら、すぐにその息は嗚咽となって吐き出された。

母が、泣いた。ついに。

俺は、そのことにも胸を震わせた。

あばら家を見ても、『壁のアルバム』を見ても、写真の裏に書かれたメッセージを見ても、裏庭の花壇を見ても、決して泣かずにいた母の胸のなかで、二〇年ものあいだ強固に積み上げてきた心の壁が、ついに瓦解したのだ。

「これが、花の森、か……」

誰にともなくつぶやいた俺の両目からも、ぼろぼろとしずくがこぼれ出した。

三人の目の前に広がった斜面の桜は、すっかり散り終えて、まばゆい新緑の丘に変わってい

た。

しかし、散った桜の花の替わりに——、先週、俺が、斜面全体にびっしりと生えたただの雑草だと思っていた下草が、いつせいに花を咲かせていたのだ。

父が半生をかけてつくり出した『花の森』の斜面は、いま、まばゆい薄紫色で埋め尽くされていたのだった。

里奈は、むせび泣く母の丸まった背中をそっと撫でた。

「よかった。お母さんに見てもらえて」

うん、うん、と母は頷きながら泣き続けた。

紫花菜。

生前の父が、家の門の手前に作った花壇で毎年咲かせていた花。桑畑村に引越したあとも、裏庭に花壇をつくって咲かせていた花。

俺たち家族の花。

「こんな、大掛かりで、遠回りなこと、するなんて……」

俺が潤み声で言うのと、里奈が泣き笑いで頷いた。

「ほんとだよ。ちゃんと口にしてくれないと伝わらないよ。お父さん、不器用すぎるよね」里奈の言葉に、抑えていた母の泣き声が大きくなった。

俺は手の甲で涙を拭うと、「はあ……」と深呼吸をした。そして、そうか、そうだったのか、と自分のなかで腑に落ちた想いを口にした。

「許せないけど、嫌いじゃない——」

「え、なに？」

頬にしずくを伝わせながら里奈が訊き返す。

「俺が、この二〇年間、ずっと胸のなかで抱えてきた心のもやもやの正体」

「それが——」

「うん」

父の行動は、許せない。

でも、父のことは、嫌いじゃない。

この二つの「一見すると相反する感情」を一括りにしようとする我心中に大きな矛盾が生じて——、結果、俺は苦しみ、盲目になっていったのだ。だから、そんな一括りの感情が「ある」ということにすら気づけず、あるいは認められないまま生きてきてしまった。でも、本当は、二律背反するような想いは「ある」し、それを抱いていても「いい」のだ。矛盾を抱えていても構わないし、それは矛盾ではないのかも知れない。そのことに俺は、ようやく気づいたのだ。

「許せないけど、嫌いじゃない——か」

里奈が、自分に言い聞かせるように復唱した。

「うん……」

頷いた俺は、子供のように泣いている母の背中をそっと押して、近くにあるベンチに座らせた。そして、その両側に俺と里奈が腰を下ろした。

「はあ……、この景観には、俺も、さすがに驚いたわ」

自分の感情を落ち着かせようと心を碎きながら、俺は言った。

「でしょ」

里奈も、ようやく落涙を止めていた。

「お前さ、『花の森』の意味、だいぶ前に気づいてたんだろ？」

俺は、母の頭越しに言った。

「まあね」

「やっぱり、そうか」

「先週ここに来たとき、紫花菜がぜんぶ咲きかけの蕾だったの。だからお父さんは立ち入り禁止にしたんだって」

言いながら里奈は、目の前に広がる『花の森』を見た。道路と斜面の境界を区切っているチーン。そこにぶら下げられた「私有地につき立ち入り禁止」と書かれた札。

父は、多くの花見客に踏み付けられないよう、家族の花を守っていたのだ。

「なんで教えてくれなかったんだよ」

「だって、サプライズにした方が感動が大きくなって」

里奈は、少し悪戯っぽい顔で微笑んだ。

その顔を見て、俺は別のことに気づいた。

「あつ、そうか」

「なに？」

「だから、お前、母さんをここに連れてくる日を、一週間遅らせてもいいって」

「正解」

「ったく……」

深いため息をついた俺を見て、里奈はくすくす笑った。

「わたしね、裏庭に紫花菜の花壇があることも、だいぶ前から知ってたんだよ」

「だいぶ前？」

「うん。じつは、ずーっと前に、一人でこの村に来たことがあるの」

「え？」

俺も、母も、思わず目を丸くしてしまった。

「でね、お父さんの家を見つけて、誰もいないあつて、恐るおそる裏庭を覗き込んでたら、遠くから歳をとったお父さんが歩いてきてさ。しかも、なんか、不審者を見るような目で見られた気がして——、わたし、思わず逃げ出しちゃって」

「ちゃんと、会わなかったのか？」

「うん。そのまま敵前逃亡しちゃった」

そう言って里奈は苦笑してみせた。

「なるほど。だからお前、先週、あの家に入ったとき、カーテンを開けて裏庭をチェックしてたのか」

里奈は、もう何も言わず、ただ穏やかに微笑んでいた。

と、そのとき、ずっと泣いていた母が口を開いた。

「はあ……、もう、二人とも、全部わたしに内緒で……」

俺は、里奈と顔を見合せて、フツと笑った。

「そう言う母さんだつて、俺たちに、父さんからの手紙を内緒にしてたけどね」

「たしかに！」

「だつて、あれは……」

母が、言葉を詰まらせたとき、遠くの山でウグイスが鳴いた。

その長閑で澄みやかな声に耳を澄ましながら、三人は黄緑色と薄紫色のツートンカラーになった「花の森」を眺めた。

「俺さ、この花が散る頃に、種を取りにくるよ」

「種？」

「種？」

母と妹が、同じタイミングで同じ言葉を発したので、俺はクスツと笑って答えた。

「うん。許せないけど、嫌いになれない人が咲かせてくれたこの花の種を取って、次は俺が家族を作ったときに庭に蒔こうかなって」

すると今度は里奈がクスツと笑った。

「お兄ちゃんって、ほんと鈍いよね」

「え、なんだよ、それ」

「わざわざ、ここに取りにこなくても、もう持ってるじゃん」

「は？」

「ほら、お父さんの形見」